

Medicine Health  
医療・健康分野のスーパーバイオニアたち

23

## 北里柴三郎 第1回ノーベル賞にノミネートされた「細菌学の父」

文 高橋 誠

text by Mac Takahashi

学校法人慈恵大学広報推進室長  
医療・健康コミュニケーター

北里柴三郎(1852~1931)は、東京大学医学部を卒業後、細菌学の研究のためドイツ・ベルリン大学へ留学、ロベルト・コッホに師事し、1889(明治22)年、世界で初めて破傷風菌の純粹培養に成功しました。



北里柴三郎、高木兼寛など明治期の偉人が多く眠る青山霊園(東京都港区)。桜の季節はお花見スポットにもなっている。

翌1890年、破傷風菌抗毒素を発見、血清療法(菌体を少しずつ動物に注射しながら血清中に抗体を生み出す手法)という画期的な新療法を開発しました。

この功績で、共同研究者のE・ペーリングが第1回ノーベル生理学・医学賞を受賞しましたが、共同受賞が一般

的な現在の選考法であれば、柴三郎も当然の受賞となったことでしょう。帰国後は日本初の伝染病研究所(現東京大学医科学研究所)、北里研究所、慶応義塾大学医学部の創設、ペスト菌の発見、日本医師会の統一、予防医学をライフワークにするなど、歴史に残る数々の偉業を成し遂げ、「日本細菌学の父」と呼ばれています。

熱と誠があれば、何事でも達成する

1891(明治24)年、ベルリン滞在中の柴三郎を訪ねた若き研究者・荒木寅三郎(医師、後に京都帝大総長)に、「人に熱と誠があれば、何事でも達成する。世の中が行き詰まったと言う人があるが、大いなる誤解。世の中は決して行き詰まらない。行き詰まるのは、本人自身の熱と誠がないからである。熱と誠をもつて十分に学術を研究したまえ」と語りかけました。

脚気の原因を細菌とする東大閥の説に与しない学術論争の展開、近代医学における欧米諸国と日本の圧倒的格差

への挑戦など、様々な障壁、波乱と闘いながら自ら道を切り拓いてきた柴三郎が、その体験に基づき、伝えようとした一つの信念でありましょう。

柴三郎が体現した「開拓・報恩・睿智と実践・不撓不屈」の精神は、後進の研究者、現代の医療界に脈々と受け継がれています。

享年78歳、脚気の原因を栄養と喝破した研究論文がビタミン発見を導いた「ビタミンの父」高木兼寛と同じ東京南青山の青山霊園に眠っています。



## Profile

学校法人慈恵大学広報推進室長。医療・健康コミュニケーター。東京生まれ横浜育ち。慶應義塾大学経済学部卒。ミスノ広報宣伝部、リクルート宣伝企画部、米国印刷会社 NewDesignConcepter (LA 在住12年)、食品会社エグゼクティブPRアドバイザー、ゴルフ場経営など日米複数企業の広報・マーケティング職を経て、2004年より現職。「病院広報研究会」、「湾岸下町ライフデザイン戦略会議」、「経営戦略ユニット・海医会」主宰。ダイヤモンド・オンラインで連載コラム「森田療法式・心の健康法」を執筆中。趣味はゴルフ、ワイン(日本ソムリエ協会ワインエキスパート#58)。